

ドストエフスキ―・ノート(4)

――一八七三年の「作家の日記」――

中村 健之介

1. 週刊誌『市民』

一八七二年十二月十二日、ドストエフスキ―の親友の詩人アポロン・マイコフは、評論家ニコライ・ストラ―ホフに宛てた手紙にこう書いている。週刊誌『市民(「グラジダニン」)』の発行人であるヴラヂーミル・ペトロ―ヴィチ・メシチェルスキ―公爵が「ドストエフスキ―と、フリーポフと、自分(「マイコフ」)を毎週火曜、自宅の食事に招くことにした」(ナウカ版「三〇巻本ドストエフスキ―全集」第二一巻三六〇頁。以下この全集の巻と頁を21・360のように示す)。

ヴラヂーミル・メシチェルスキ―の母方の祖父は近代ロシア文学の父といわれるニコライ・カラムジーン、名門貴族である。皇太子アレクサンドル(後のアレクサンドル三世)と親しく「帝政派」の有力者だった。メシチェルスキ―自身もの書きで、ペテルブルグの上流社交界を題材にした小説などを書いており、アレクサンドル三世やニコライ二世の時代には帝政派の

社会評論家として活躍した。

メシチェルスキ―の『市民』は、結構寿命の長い雑誌だった。一八七八年から八一年まで三年の休刊期間があるが、その後一九一四年まで続いた。後に月刊になったが、最初の数年は月曜発行の週刊で、ニュース重視の、組版も新聞に近い「新聞型雑誌(「ガゼータ・ジュルナル」)」だった。

『市民』の創刊は七二年一月。初代編集長はグリゴリー・K・グラドフスキ―であった。発行人メシチェルスキ―は、次の編集長としてドストエフスキ―を選んだのである。

一八七二年十二月十五日、ドストエフスキ―はメシチェルスキ―の誘いを受けて『市民』の編集長を引き受けた。ストラ―ホフは、「ドストエフスキ―はよく考えもしないで、そそくさとした感じで引き受けてしまった。この(「ドストエフスキ―を『市民』の編集長に据えるという」)アイデアを出したのは、マイコフだった」と書いている。

メシチェルスキ―は『わが回想』(一八九二年)で、ドスト

エフスキーの方から「そちらが望みなら、わたしが編集を引き受けてもいいですよ」と言って、「自分から年俸三〇〇〇ルーブリと執筆原稿料（「行くくらの計算）」という条件を出してきたと書いている（21・361 またモチュリスキー『ドストエフスキー』第十九章「『市民』の時代」）。

一八七三年一月から、ドストエフスキーは自分の編集することになった『市民』に時評風エッセイ「作家の日記」を書きはじめた。全部で十五回続いた連載の第一回、「1 はじめに」は、編集長に就任したドストエフスキーの挨拶と就任経緯について「いやあまいな説明である。（「1 はじめに」と「2 むかしの人たちが」が一月一日号に、「3 環境」が一月八日号に載った。）

いま私の手もとに、ドストエフスキーの編集による『市民』の一八七三年第二号（一月八日、月曜発行）の目次を写した写真がある。次のような内容である。

*公爵メシチエフスキー「ナポレオン三世」。ペテルブルグ時評。デマとそれをでっちあげた者たち。ナポレオン三世の死で、ペテルブルグに何が起きたか。政治、文学、演劇界の事件。

*ドストエフスキー「作家の日記」

*チユツチェフ「詩」。

*モスクワ短信。外国とわが国の年金事情。ペテルブルグ上流

社交界スケッチ。一外国人教師の、ドリノルーコワ伯爵夫人への返答。

*書評 マカーロフ『クリミヤ・ルポルターージュ』、ツインメルマン『北米合衆国』、バーブスト『解説、国民経済の始まり』、タガフツェフ『元老院控訴審判例と刑罰法典』、サルティコフシチエドリッ『ペテルブルグの田舎者の日記』。

*世界各地のニュース ナポレオン三世の死でパリに何が起きたか。さまざまな殺人事件。イルクーツクの出来事。おもしろくて楽しい農民流判決。信じがたい殺人。刑事裁判におけるセンチメンタルなごまかし。姿をくりました殺人犯。最高の現代作家はだれか。A・クラエフスキーの祝賀会。光線照射による眼の治療。

（この目次の写真は、Yu・G・オクスマンの論文「『市民』編集部のドストエフスキー」に載っている。グロスマン編『ドストエフスキーの創作』一九二二年 所収）

当時ロシアの雑誌の多くは、「政治と文学の雑誌」と自称していた。『市民』の表紙にも「政治と文学の雑誌」と刷られている。文学が政治的ポジションを積極的に表明するのが十九世紀ロシアである。右の第二号の目次で見ると、「ニュース」欄には刑事事件や裁判の記事が多いが、それは当時の流行であり、新編集長ドストエフスキーの興味を映しているわけでは必ずし

もない（『宣教師ニコライの全日記』第一巻註解⁵²「市内郵便」参照）。目次を見ると、たしかに硬派の政治的主張が打ち出されてきたように思えない。しかし『市民』の発行人が帝政支持者であり皇室と近い関係にあることはだれもが知っていた（21・360）。この雑誌は、一八七〇年代のペテルブルグの論壇において長く反体制派の牙城であった雑誌『現代人（ソヴレメンニク）』（一八六六年廃刊）とそれを引き継いだ『祖国雑誌（オチエチエストヴェンヌイ・ザピスキ）』に対抗する、体制支持派の雑誌の一つであった。

2. ドストエフスキーの周りの人々

ドストエフスキーが『市民』の編集長を引き受けたことは、ひとむかし前は、ドストエフスキー研究者の間では批判的にされた。日本でもたとえば松浦健三は「このような政治家（メシチエルスキー）」と近付いたことは、ドストエフスキーの生涯でも恐らく最大の汚点と言えるであろう」とまで書いている（一九八〇年の新潮社版『ドストエフスキー全集 別巻 年譜』³²⁰）。「帝政は敵だ」と信じていた研究者がたくさんいたのである。

しかしドストエフスキー本人は、一八四〇年代末、「革命的青年たち」の集まり「ペトラシエフスキー・サークル」に属していたときでさえ、皇帝による統治を支持していたのである。

このサークルの青年たちは、一八四七年、四八年に発表されたグリゴロヴィイチの『村』『アントン・ゴレムイカ』、ツルゲーネフの『獵人日記』（単行本発行は一八五二年）などの、農村を舞台とするややセンチメンタルな小説に教えられて初めて農民に同情の目を向け、ロシア社会の基盤である農奴制に感情として反対するようになり（『獵人日記』はロシアの『アंकル・トムの小屋』であった）、国教ロシア正教会批判にも進んだ。しかしかれらの多くは正教会を批判はしても無神論者ではなく、神による歴史支配を真剣に信じる者たちであった。正教会批判が帝政批判と結びついていたかどうか、ペトラシエフスキー・サークルの全員については、すぐには答えられない問題である。ドストエフスキーのように、共和制に反対し、「善い皇帝による統治」を歓迎する者たちもいた。

ドストエフスキーもその一人であるが、一八四〇年代に青春を迎えたロシア知識人（「四〇年代人」）の頭がいわば燃え上がるのは、「すべての人が兄弟のようになる」という千年王国的な理想の社会像「新しいエルサレム」を想像するときである。ドストエフスキーの「社会主義」は、非政治的な、いわば終末論の社会的ヴァリエーションであったと言つてよい（中村「転向のあしあと」、コマローヴィチ「ドストエフスキーの青春」、ペリチコフ編・中村編訳『ドストエフスキー裁判』参照）。

一八七〇年代のドストエフスキーの手紙、あるいはドストエフスキーの受け取った手紙（たとえば一八七六年一月三十一日

のポベドノースツェフからの手紙。『文学遺産』第十五巻130）を見れば、かれは明らかに「帝政支持派」と呼んでよい人たちと交際していたし、その人たちとの間に仲間意識があったことは、否定できない。妻アンナも『回想』で次のように書いている。

「新しい雑誌『市民』」の編集部周辺には、考えや信念を同じくする人たちのグループができました。K・P・ポベドノースツェフ、アポロン・マイコフ、T・I・フィリーポフ、N・N・ストラーホフ、A・U・ポレツキー、エヴゲーニー・ペローフといった人たちでした。この人たちはフョードル・ミハイロヴィチ（ドストエフスキー）に好意と共感を持っている人たちでした。この人たちと一緒に仕事をすると思欲が湧いてくるとフョードル・ミハイロヴィチは感じていました」

ポベドノースツェフは、皇太子アレクサンドルの傅育官であり、一八八〇年からは二五年の長きにわたってロシアの宗教行政全体を管理する宗務院シノドの総監の席にあった人物である。二十世紀の「進歩的歴史観」に立つ歴史家たちはポベドノースツェフを「反動の権化」のように言ってきた。ドストエフスキーはそのポベドノースツェフと長きにわたって文通し、『未成年』『カラマーゾフの兄弟』執筆中はポベドノースツェフからしばしば助言を受けていた。

ポベドノースツェフは、東京神田駿河台のニコライ堂で知られるロシア正教会日本宣教師団団長ニコライの熱心な支援者でも

あった。一八八〇年のニコライのロシア帰国時の日記には、ポベドノースツェフが何度も登場する。ニコライ日記から想像されるポベドノースツェフは、いわば「後ろ向きの理想主義者」であったようである（『宣教師ニコライの全日記』第一巻注解48「ポベドノースツェフ」参照）。

アポロン・マイコフは、「芸術派」の詩人で、自然を美しく、喜びをこめてうたった。よく知られているように、一八五五年以降の、農奴解放を中心とするいわゆる「大改革」の時代、「六〇年代人」の主張する、芸術は社会改善という大義のために仕えるべきだとする社会的功利主義的芸術観が優勢になったのだが、マイコフはそれに抵抗した。マイコフと同じ「四〇年代人」であったドストエフスキーも、実作においては「現代」ロシア社会の心の病んだ人間に目を向けていたが、芸術観においてはマイコフに近かった。ドストエフスキーとマイコフは二十歳台からの親友である。その関係は生涯続いた。ドストエフスキーのマイコフ宛の手紙からは他の人たちに宛てた手紙にはない親密感と信頼が感じられる。

T・I・フィリーポフは、スラヴ主義を奉ずる社会評論家、教会史家、政治家で、宗務院の実力者でもある。ロシア正教会日本宣教師団団長ニコライは、宣教師資金の国家予算化を図って、一時帰国した一八八〇年、ペテルブルグで、国家評議会議員や宗務院の有力者たちに請願してまわるが、フィリーポフもこの「日本のニコライ」のよき相談相手、協力者である。「フィリー

ポフは、社会における宗教と神学の宣伝者として実に力のある人物だ」とニコライは日記（一八八〇年一月三日）に書いている。ドストエフスキーはアポロン・マイコフを介してフィリーポフと知り合ったのだが、ドストエフスキーも『市民』の論文の中で何度もフィリーポフをもちあげている（『宣教師ニコライの全日記』第一巻註解⁵⁵「フィリーポフ」参照）。

ニコライ・ストララーホフとドストエフスキーの心理的にややこしい関係については、すでに「友人ストララーホフの『観察』」に書いた（中村『知られざるドストエフスキー』所収）。ストララーホフ伝を書いたドリーニンもゲルシュテインも「ストララーホフは保守主義者だった」と判断している。そのストララーホフについてドストエフスキーは「わたしの見解の半分は君からもらったものだ」とストララーホフ本人に言っていたという（ストララーホフ『ドストエフスキーの思い出』）。

ドストエフスキーは、実際に『市民』の編集の作業に取りかかるるとあまりに「雑用」の多いことに音をあげるようになるし、発行人であるメシチェルスキー公爵のわがままに腹を立てるようになるが（それで一八七四年四月には編集長を辞める）、最初は、アンナの言うように、「考えや信念を同じくする人たち」と一緒に仕事ができることを喜び、意気込んでいたのである。

ドストエフスキーが味方と感じていた人としてさらにM・N・カトコフとN・Ya・ダニレフスキーをあげることができ

汎スラヴ主義者で出版界の「帝王」であったカトコフは「帝政派」の大物である。ドストエフスキーはカトコフの雑誌『ロシア報知』に『罪と罰』『白痴』『悪鬼ども』『カラマーゾフの兄弟』を連載発表した。いわゆる後期長編小説時代のドストエフスキーは長くカトコフの支援を受けていたのである（『宣教師ニコライの全日記』第一巻註解¹⁶⁴「カトコフ」参照）。

ダニレフスキーとドストエフスキーは一八四〇年代末、ペテルブルグのペトラシエフスキー・サークルですでに知り合っていた。それから二十年経って一八六九年に、ダニレフスキーの主著『ロシアとヨーロッパ』が単行本として出る。ドストエフスキーは、ダニレフスキーのこの論文がまだ雑誌連載中だったときからすでに強い関心をよせ、それを賞賛している。『ロシアとヨーロッパ』は、ロシア文化と他のタイプの文化（とりわけヨーロッパ文化）とは別種の価値観をもっているものであり、異なる価値観の文化を簡単に比較して優劣を言うことはできないという思想的主張の書である。それは西欧文化の絶対的優勢を疑い、あらゆる文化は基本的に平等であるという考えを含んでいるが、目立つのは、西欧文化に対抗し世界史におけるロシア文化の未来の役割を強調する戦闘的な汎スラヴ主義である。ダニレフスキーは、ペトラシエフスキー・サークルにあった普遍主義的ユートピアニズムを失ったわけではないが、それがロシア・ナシヨナリズムと一体化するところが、いかにも国民意

識のつよまった時代のロシアの知識人である。いうまでもなく、普遍主義の衣をまとったナシヨナリズムは、ドストエフスキーにも顕著である。一八八〇年のドストエフスキーの講演「プーシキン」の、ロシア主導による「万民の一体化」の主張は、その一例である。それはソ連の東欧支配の論理にもつながる（中村健之介「ドストエフスキーのなかのスターリン」参照）。

ダニレフスキーはもともと生物学者であり、かれの議論は自然科学的な装いをしているが、しかし芯はやはりロシア・ナシヨナリズムである。それはかれが死の直前、一八八五年に発表した『ダーウイニズム』になると歴然とする。そのことはA・ヴチニッチが『ロシア思想におけるダーウイン』（Alexander Yucinich, *Darwin in Russian Thought*, 1988）でくわしく紹介している。一八八〇年代は、メンデレーエフやロバチエフスキーの活躍からもわかるようにロシアの自然科学が発展した時代であり（梶雅範『メンデレーエフの周期律の発見』一九九七年参照。梶の研究は一八六〇年代に多く光が当てられているが）、同時に、政府の音頭とりもあつて、イワン・アクサーコフの「スラヴ慈善協会」にも見られるように、ロシア社会のスラヴ主義的熱気が高まった時代である。言い換えると、一八六〇年代から続いている新しい自然科学的世界観と古い宗教的世界観の闘いが、現実の社会勢力の闘いとして激しくなった時代である。ダニレフスキーは著書『ダーウイニズム』で、生物界のあらゆる変化は至高の叡智によってあらかじめ決まっている

のに、ダーウインの「適応」説は、その叡智を否定するものだと主張している（ヴチニッチ『ロシア思想におけるダーウイン』第四章）。ダニレフスキーのダーウイン批判は、結局は「ダーウインは新しい異端だ」とする体制派の神学的反ダーウイニズムを助けるはたらきをしたのである。

ついでながら日本宣教師団長ニコライは一八八〇年のロシア帰国中の日記に、ある会合でロシアでのダーウイニズムの紹介者かつ批判者あつたストラーホフが、「ダニレフスキーの、ダーウインについての意味不明瞭な手紙を読み上げた」ことを書いている。宗教の側に立つニコライまでが「意味不明瞭」と感じるものが、ダニレフスキーの手紙にあつたのだろう（ニコライの日記一八〇〇年一月二十九日参照）。なおニコライは、『ニコライの見た幕末日本』の一節「日本人の無神論は西欧のそれとは異なる」で、自然科学的世界観と神の啓示との衝突について書いている。

自然科学と歴史解釈を結合したバックルの『イギリス文明史』がロシアの知識人に与えた影響もそうだったのだが（『宣教師ニコライの全日記』第一巻註解¹²⁶「そういうことはふつうの死体ではありえない」参照）、擬似科学的な装いをしたダニレフスキーの論は、ドストエフスキーに対して強い説得力をもったと思われる。ドストエフスキーも対西欧コンプレックスを思索の情熱源としているロシア人である。かれは、『ロシアとヨーロッパ』のあたかも科学の法則に裏付けられているかのように

作られたスラヴ優勢説に全面的に共感した。

このような人々が、『市民』編集長となったドストエフスキの周辺にいた。政治体制については見解が合致しており、活動分野を異にするさまざまな才能が、ドストエフスキを刺激するようになったのである。

ストラホフが『ドストエフスキの思い出』で書いているように、ドストエフスキは近くにいる人の意見を聞いて新しい着想を得たり発言を応用したりする能力は抜群であったから、強い個性と能力をもつ「同人」たちを近くに得て、かれの関心の輪は広がり、社会のさまざまな事件を論評する意欲も湧いてきたはずである。ドストエフスキは「作家の日記」という社会評論を書く刺激をそのあたりから受けていたのだろう。もちろん、ドストエフスキが受身であったのではない。「作家の日記」の直前に発表された小説『悪鬼ども』（一八七二年）が示しているように、もともとかれ自身が、外の異様な事件に猛烈な関心と興味を抱き、そこにいる「奇妙な代物」（『ペテルブルグ年代記』）や「死産児」（『地下室の手記』）を自分の手術台に引きずり上げて、持ち前の高性能内視鏡と鋭いメスで解剖しないではいられない心の医師だった。しかし、『市民』連載の一八七三年の「作家の日記」と、その三年後の一八七六年から個人雑誌として発行された『作家の日記』の両方の話題（自殺者の増加の問題、世代間の断絶の問題、孤児の問題、新しい裁

判制度の問題等々）が示しているのは、ドストエフスキの著作の「社会性」のつよまりである。（その「社会性」の論理の前近代性については、『永遠のドストエフスキ』222～227の「社会評論」は社会評論か）に書いた。）

3. 元政治犯のジャーナリズム復帰

メシチエルスキの『わが回想』によれば、かれは「教会と専制の権威を守り、広がりつつあったリベリズムの正体をあばく」ために『市民』を創刊したのだという。しかしメシチエルスキが『市民』の初代編集長として招いたのは、教会と専制の支持者ではなくリベリストの評論家グリゴリー・K・グラドフスキー（一八四二～一九一五）であった。（一八八〇年のドストエフスキのプーシキン講演を批判した大学教授アレクサンドル・D・グラドフスキーとは別人。）帝政派が「リベリズム熱の正体をあばく」ために創刊した雑誌にリベラルの編集長というのは納得できない人選であるが、リベラルといってもグリゴリー・グラドフスキーはニコライ・ストラホフと同じく雑誌『黎明（ザリャー）』の同人であり、人脈からいえばドストエフスキにも近い評論家である。

ソ連時代の文学研究者フリードレンデルは、メシチエルスキは「発行人である自分の方針と名前では、読者に受けられないということを知っていたので」、リベラル派のグラドフスキーを

看板にしたのだ、と解釈している。グラドフスキーが編集長であった一八七二年の『市民』の定期購読者数は約一〇〇〇人で、フルードレンデルによれば、この数は『市民』が「ぜんぜん人気がなかった」ことの証拠だという。そこでメシチェルスキーは有名作家ドストエフスキーに目をつけたのだという(21・360)。

一八七二年十二月十六日、メシチェルスキー、グラドフスキー、ドストエフスキーの三人は出版管理局へ出頭し、グラドフスキーに代りドストエフスキーが新編集長となるとい願い出を提出した。承認が下りるまでいろいろめんどうなことがあった(前掲オクスマン『『市民』編集部のドストエフスキー』参照)。出版管理局からの打診に対して公安警察「第三課」は、「この人物(ドストエフスキー)が編集長の立場でこれから活動することを許可するについては、当課としては責任がもてない」と返答した。

二十三年前、一八四九年、二十八歳のドストエフスキーは「ペトラシエフスキー・サークル事件」で「第三課」によって逮捕された。そして「著述家ベリンスキーノ宗教並びニ政府ニ対スル犯罪的内容ヲ有スル書簡ノ流布」の廉で有罪判決を受け、それから四年間シベリアのオムスクで懲役の刑に服した。

一八五四年二月にオムスクの懲治監獄を出た後、一八五七年に貴族身分への復帰が認められ、五九年四月には病気を理由に退職(軍籍離脱)し、執筆許可も得た。ペテルブルグへもどっ

て、兄ミハイルとともに雑誌『時代(ヴレーミヤ)』第一号を発行したのは一八六一年一月である。発行人はミハイルであるが、編集の中心はドストエフスキーであった。表に名前は出ていないが、それは半ば公然の事実だった。

『時代』が発行停止になって、一八六四年三月から新しい『世紀(エポーハ)』が刊行される。そこでも発行人は依然として兄ミハイルであったが、事実上の編集人は弟ドストエフスキーである。そのことはドストエフスキー自身が一八七三年「作家の日記」の第四回「個人的なこと」の中で書いている。

だから、元政治犯ドストエフスキーに対する疑いはとうにはれていたはずだと私たちは思うのだが、帝政ロシアでは一度ついた「反抗者」においてはなかなか消えなかつたようである。「第三課」の回答は、そのことを示している。「第三課」は一八七〇年代になつても元政治犯ドストエフスキーに対する監視を続けていた。ドストエフスキー自身も相手の嗅覚は知っていただろう。かれは一八七一年七月、西欧の都市を転々とした四年余の生活を切り上げてドレスデンからロシアのペテルブルグへ帰ることにしたとき、入国時に受けるロシア警察の検査を警戒して、帰国直前にかんりの量の原稿を焼き捨てている。

一八四九年のペトラシエフスキー事件でドストエフスキーの親友の詩人アポロン・マイコフは、「第三課」による事情聴取を受けただけで、拘留されることはなかつたのだが、それでも一八五五年のアレクサンドル二世即位まで秘密の監視を受け続

けていたことがわかっている（『ドストエフスキー裁判』282
記録十三）。

しかしドストエフスキーは、一八七一年一月から、カトコフ発行の雑誌『ロシア報知』に『悪鬼ども（悪霊）』の連載をはじめ、二年目の七二年十二月に完結した。メシチェルスキーから『市民』への誘いがあったころは、もう『悪鬼ども』の仕事は終わっていた。ロシアのリベラルや社会改革志向のインテリゲンツィヤの目から見れば、『悪鬼ども』のドストエフスキーの姿勢は、革命運動誹謗者のそれであり、『悪鬼ども』は革命運動についての「才能ある、悪意にみちた暴露文学」（ゴリキー）であった。つまり、だれもが、ドストエフスキーは体制保持の陣営に公然と与したのだと思った。

「第三課」もそう思ったのだろう。「第三課」は、「責任は持てない」と回答したが、『市民』編集長交替の願い出に反対はしなかった。

公安警察「第三課」が反対しないので、出版管理局はペテルブルグ検閲委員会に対して、メシチェルスキーの申請によってドストエフスキーが『市民』の新しい編集長になるという通達を出した。ドストエフスキーが管理局の承認書を受け取ったのは、一八七二年十二月三十一日である。（もちろんその前に承認予定は通知されていただろう。）

この承認が出たことで『市民』周辺にいた人々は、というこ

とは右のポベドノースツェフやカトコフもということだが、「ドストエフスキーは一八四九年に政治犯の刻印を押されたが、いまやその政治犯としての罪を完全にあがったのだ」と思ったという（『文学遺産』第八十六巻「未刊だったドストエフスキー」599）。

これが『市民』編集長就任の、ドストエフスキーにとつての一つの意味だったのではないだろうか。ドストエフスキーはもはや「危険人物」ではないと公認されたのである。

4. われわれには秩序がない

さて、『市民』連載の「作家の日記」の第一回目、この「はじめに」を読んで、印象に残ったことが一つある。中国（清国）イメージを背景にして描かれているロシア・イメージである。

イギリスの『デイリー・ニューズ [Daily News]』紙の北京特派員が書いた同治帝の成婚（一八七二年十月十六日）の記事が一八七二年十二月の『モスクワ報知』新聞に転載されていた。そこには「清国皇帝が行なう一切のこと、皇帝をめぐって起きる一切のことは、儀式の書物に厳格に定められている。皇帝の生涯のあらゆることは、その生誕から崩御に至るまで、すべてこの書物にあらかじめ定められている。この書物は二〇〇巻から成るといふ」と書かれていた（21・373）。

ドストエフスキーはこの記事を読み、中国の官庁だったら自

分の編集長就任申請はどのように受理されたらどうかと想像する。中国はあらゆることが「千巻の儀式の書」(21・7)に従って行なわれる国であるから、編集長就任の手続きも、「第三書記の第三補佐官」が定められている規定に従って定められたとおりの訓示を垂れて辞令を授与し、こちらは黙って賄賂を差し出すだけであろう、とやや皮肉な調子で書いている。

出版管理局でいろいろとやっかいな手続きがあり、すったもんだの末にようやく編集長就任が承認されたことを暗示しているのは明らかなのであるが、ドストエフスキーが言いたいのは、単にロシアでは官僚制度 (bureaucracy) が整備されていないということだけではない。中国には「儀式の書」が、依拠する形式が、あるのに、ロシアにはそれが無いということである。

「おそらくわれわれも中国と変わりはないのだろう。ただ、中国にある秩序 [порядок, ポリヤードク] が、われわれには欠けているのだ。われわれは中国ではもう終わりかけていることを、ようやく始めようとしているのだ。われわれも間違いなく、「一切が『儀式の書』で決まっているという」同じ終局に行き着くだろう。だが、それはいつのことだろうか。千巻の儀式の書を手に入れ、もう何も深く考えることをしないでいられる〔あらゆることを既定の順序に従って行う〕権利をすっかりわがもののできるようになるためには、われわれはこれから先少なくとも一〇〇〇年にわたって、沈黙考 (Задумьбага) の歳月を経ねばならないだろう」(21・7)

実はロシアも、繁文縟礼体質においては中国と同じなのだが、中国で実際に行われている秩序が、ロシアにはない。形式遵守の習慣がわれわれのところでは、まだ形成されていない。形式好きなのに、その形式が個人の身につけていないし、社会でも共有されていない。ルールがほしいのに、だれもルールを守らないのだ。だからわれわれはみな、ルール以前のありとあらゆる問題を一所懸命考えねばならないのだ、考えざるをえないのだ。ルールが実行されていけば、社会は成り立つが、個人および社会が依拠する確固たるルール、規律というものもまだないから、われわれは神の存在などということを考えないではいられない。われわれは人間も社会も内実は自然状態のままなのだ、だから考えないではいられないのだ、というのである。

そういう「秩序がわれわれロシア人には欠けている」という自己認識は、ドストエフスキーの作品のいろいろなところに顔を出している。小説『未成年』はトルストイの『戦争と平和』に対抗して書かれたが、それは秩序の有無をめぐる対抗だった。トルストイの描いているような美しい秩序を保持している貴族の家族は「現代ロシア」には存在していないというのが、ドストエフスキーの認識である。『未成年』の草稿には、『戦争と平和』に書かれている「時を経て確立したかたち」「積み重ねられてきた規律」への疑いが長々と述べられている。

「全体としては、一つの社会層としては、かれら〔トルストイの小説の貴族たち〕がある完璧なものを表しているというこ

とは、議論の余地がない。このロシア人の上層社会の根底には、議論の余地のない、ゆるぎない何かがある。に実在するわけだ。：：そこにはすでに時を経て確立したかたちがある。そこには積み重ねられてきた規律がある。そこには一種の名誉と義務がある」

しかし、「こどもの頃から自分の家族のことで考えこみ、こどもの頃から自分の父親に、父親および自分をとりかこんでいるものに、気品がないということまで心を傷め、特に重大なことだが、自分たちの生活全体の基礎が混乱した偶然的なものであることを理解しはじめ、確固としたかたちと父祖相伝の伝統がないことを理解しはじめている、そういうこどもたちがいる。そういうこどもたちは、わたしの言うこの作家「トルストイ」を羨ましいと思わないではいられない。しかし、多分、愛しはしないだろう」(グロスマン編著・中村健之介訳『ドストエフスキーの蔵書』^{21f})

同じ考えは、ドストエフスキーの『未成年』のヴェルシーロフや、セルゲイ・ソコリスキーによって語られ、また体現されている。「現代」ロシアでは、名門貴族といえども「偶然の家族」だというのである(中村健之介『ドストエフスキー人物事典』の『未成年』を参照。また同書³⁷⁹も)。そして、ロシアの「くちばしの黄色い若造インテリ」イワン・カラマーゾフは、ルールがないからわれわれは神のことまで真剣に考えざるをえないのだ、と語る。

われわれが中国のような不動の秩序を確立するには一〇〇〇年かかるだろうとドストエフスキーは言う。これは、「ロシア社会の根底はケーオスだ。すべてがばらばらだ。おそろしいほどの勝手気まま、そういうおそろるべき無責任な自由の生きている国だ」という、ロシア・イメージである。

そしてそれは、ドストエフスキー自身の人間観の底にある自己イメージと相似形をなしているかのように見える。

右の「3 元政治犯のジャーナリズム復帰」で私は、ロシアのリベラルや社会改革志向のインテリゲンツィヤの目から見れば、ドストエフスキーの小説『悪鬼ども』は革命運動についての「才能ある、悪意にみちた暴露文学」だったということを言った。

ドストエフスキー自身も『悪鬼ども』が革命運動にかかわるロシアの青年たちの未熟な姿をあげたものであることを否定していない。かれは、西欧派や反体制派からの反発を予想していた(たとえば一八七〇年三月二十五日、A・マイコフ宛のドストエフスキーの手紙を参照)。

革命運動にかかわる青年たちをとりあげてその幼稚な実態を「暴露」したから「進歩派」からドストエフスキー非難の声があがった、ということではあるのだが、しかし、ドストエフスキーがそれ以外のことのできたのだろうか。立派な革命運動家を描くことができただろうか。

ドストエフスキーは常に人間の畸形的性質を「暴露」する。それこそがかれの作家としての才能なのである。誤解をおそれずに言うと、『悪鬼ども』の深部にあるのは、一八六九年の「ネチャーエフ事件」のロシア青年たちの未熟な政治感覚に対する批判ではない。それがあの小説のドミナントではない。ドストエフスキーのいわば視力優秀な乱視の目で見られたら、どんな革命青年も、ツルゲーネフの『その前夜』のエレーナやインサーロフのような、木偶の理想主義者でいられるはずがないのだ。「『貧しい人たち』の人道主義者ドストエフスキーが、『悪鬼ども』ではその人道主義を捨ててしまった」という言い方がしばしばなされたが、その批評はまちがっている。ドストエフスキーの文学は、処女作『貧しい人たち』以来一貫して、自ら律する信念のない「死産児」、社会の暗い片隅で美しいこととあこがれている奇妙な「地下の人間」を主人公としている。かれらは、拠るべき規律などその破片さえも持ち合わせていない。それこそが「わたしのいつもながらの本質なのです」とドストエフスキー自身が言っている（一八六九年三月十八日、ストラーホフ宛の手紙）。ドストエフスキーの文学は人間の畸形的正体を暴露する文学であり、『悪鬼ども』はその「現代革命青年編」である。

ドストエフスキーに観察されると人間は同種類になる。正体暴露されるのは革命青年たちだけではない。青年たちの父、母の世代にも「積み重ねられた規律」はない。『悪鬼ども』でも、

馬づらの地主貴族夫人ワルワラ・ペトロウナとその「ステッキボーイ」になって暮らすハンサムな元大学教授ステパン・トロフィーモヴィチの腐ったような関係がよい例である。ゴリの『死せる魂』の畸形的無秩序が、ドストエフスキーの人物のなかでも生きている（中村『『悪鬼ども』の父』参照。『ドストエフスキー・作家の誕生』所収）。

『貧しい人たち』の「愛情乞食」の主人公、「台所の片隅の衝立のかげ」に隠れ住んでいた小役人ヂェーヴシキンが、若返って、秘密結社に入ったのが『悪鬼ども』だとさえ言っている。「地下の秘密をほじくりだす」という『貧しい人たち』のエピグラフは、『悪鬼ども』にも付されてよい。ドストエフスキーは、『未成年』（一八七五年）にいたっても「地下の悲劇を引き出したのは、独りわたしだけだ」と誇っている。『チボー家の人々』や『ジャン・クリストフ』に出てくるような理性的判断力と理想主義的意志を与えられた人間は、ドストエフスキーには出てこない。そもそも、人間は何らかの秩序に従って生きる生きものであるという啓蒙主義的人間観は、信じられていない。ジードがドストエフスキーを読んでおどろいたのも、そのためなのである。（中村「ドストエフスキーの小説の誕生」参照。『ドストエフスキー・作家の誕生』278）

ドストエフスキー個人の「いつもながらの本質」の人間イメージと、「われわれロシア人には秩序（世俗社会のルール）がない」という問題は、別のことで、両者は本当は関係ないはず

である。しかし、私はこの二つを相似形の心的問題と見なして、共鳴するかのようにとらえたいのである。

5. 「日本のニコライ」のロシア・イメージ

「われわれロシア人には秩序がない」という認識は、ロシアの「古事記」といわれる『原初年代記』（十二世紀初頭）の、ルシの民が「われらの国は大きく豊かだが、秩序がない。公となってわれらを統治するために来てほしい」と言つてヴァリヤーグ人を統治者として招いたという伝承（八九二年の項）にもつながるロシア・イメージである。それはまた、十九世紀のロシア知識人が、西欧を秩序の国と意識して、それとの対比において見出した自己イメージでもあるだろう。

幕末明治の日本で五十年間ロシア正教の宣教活動を続けた宣教師ニコライ（一八三六―一九一二）の日記には、法律〔Закон Зако́н〕と規則〔Правило Прави́ло〕を守らぬ国というロシア・イメージがくりかえし現われる。

日露戦争の少し前、ニコライはロシアの新聞で、満人（満州人、マンチジュール）がロシア人に支配されることを嫌がり、ロシア人を追い出したがつていてという記事を読んだ。ニコライは、観光旅行で旅順から東京へ来たロシア軍人に、「ほんとうですか」と尋ねた。相手はこう答えた、

「直接弾圧しているわけではありません。統治する能力がな

いのです。どちらにしても同じことですがね。次の例で説明しましょう。

ある頭のいい満人にへどこの支配を受けたいか〜と尋ねました。その男は即座にこう答えました、へイギリスに支配されたいですね。イギリス人は胸はからっぽですが、頭はつまっています。かれらは七七の規則を作つて、支配を受ける側の指導部に与えます。そして自分から率先して規則を守り、他人にも守るようきびしく要求します。イギリス人の下にいると、何に従えばいいのかわかります。道ははっきりしていて、まっすぐです。

ところがロシア人は、胸はつまつていて、頭はからっぽです。ロシア人にとって法律は法律ではないのです。ロシア人はあるときは法律を守り、他人にも守るよう要求します。またあるときは法律を守らず、他人の違反に見て見ぬふりをします。ロシア人のもとにいますと、どうしてよいかわからず、安心していられません〜それが満人の答えだったので」（ニコライの日記、一九〇三年十二月二十日／一九〇四年一月二日）

ニコライは、「ほめられたことではない」と書いているが、このイギリス・ロシア対比を否定してはいない。

「ロシア人にとって法律は法律ではない」——これは、ドストエフスキーが一八七三年の「作家の日記」の「はじめに」で言っている「中国にある秩序がわれわれには欠けている」という認識が示しているのと同じ社会的事実を指し示していると言

ってよいだろう。

これと共鳴するロシア人と日本人の対比（ロシア人の無法傾向と日本人の遵法傾向の対比）が、ニコライの日記には何度も現われる。二つ、三つ紹介しておこう。

日露戦争時、日本の警察は政府の方針に従って駿河台のロシア正教宣教師団の警護に当たる。伝教者フェオドル豊田が宣教師団の建物から内庭へ一歩出ただけで、間髪をおかず警官が詰所から飛び出してくる。ニコライは、この敏速かつ生真面目な「メイレイ〔命令〕」の遂行がうるさくてかなわない。

「日本人は石頭の形式主義者だ。……しかし、それが日本人のよいところでもある。かれらは法律を一点もないがしろにせずに守る。江戸時代の厳格な体制が日本人をこのようにしつけたのだ」（ニコライの日記、一九〇四年二月四日／十七日）

ニコライは物情騒然としはじめた幕末に來日したのだったが、それでも江戸時代日本の厳格な監視体制が日本人に「遵法精神」を植えつけたのであり、その「しつけ」が明治になっても日本人から消えていないことを感じたのである。

ニコライは一八六九年にロシアで発表した日本紹介論文「キリスト教宣教師団から見た日本」（邦訳『ニコライの見た幕末日本』17）では、日本人は十六世紀にカトリックの宣教師たちの華々しくかつはげしい宣教活動とそれに続いたキリシタン弾圧におびやかされたのだ、それによって「日本人の頭には、ヨーロッパ人は必ずや日本を征服しようとするという考えが

深く刻まれた」のだ、「現在〔幕末〕」の日本人の外国人恐怖も十六世紀の日本人の国民的な精神的傷に根がある、という見方を提出している。「しつけ」に劣らず国民的トラウマも消えないというのである。

また、日露戦争時、ニコライは、ロシア語のできる日本人司祭を日本各地のロシア人捕虜収容所に派遣し、捕虜の「宗教的慰安」を図った。ところが突然、一人の日本人司祭が日本陸軍の収容所管理当局によって慰安活動を禁止された。この報告を受けてニコライはこう書いている。

「またしても災難発生。アレキセイ沢辺神父は……ロシア人捕虜たちからたいへん愛されていた。それが突然、捕虜のところへ行つてはならない、礼拝を執り行つてはならないというのだ。……ちよつとした規則違反をやつたのだ。これが日本のやり方なのだ。日本では法律と規則が支配している。……」

ロシアを支配しているのは法律ではなく、ウスマトレニエ「裁量」だ。そのために分裂と無秩序が広がっている。だれもが、法律は「裁量」の権利をもつ者によって好きなきに破られるということを知っている。だから、その権利をもっていない者たちは法律を知ろうとしない」（一九〇五年七月十九日／八月一日）

東北地方の教会巡回の旅で石巻で刑務所の建物を見たときは、物騒な想像も書いている。

「山に登り、海と周辺の景色を眺めた。山から下ってくる途中、キリスト教式の埋葬を行なったという理由で朽木〔日本正

教会の伝教者ペトル朽木正夫」が入れられていた刑務所を見た。さして大きくもない建物で、囚人がぎゅうぎゅう詰めののだという。わが国の囚人たちだったら、こんな刑務所は、入れられた最初の夜にぶち破って逃亡してしまうことだろう」（一八八一年五月二十二日／六月三日）

一八九〇年（明治二十三年）に来日してニコライの下で三年間働いた宣教師セルギイ・ストラゴロツキーも、日本と対比して同じようなロシア観を書いている。

「日本人のきわだつ特徴は法律を尊ぶということである。規則がある以上、それは守らねばならないのである。わたしはスラヴ人の放埒さを思った。われわれの場合は、規則を文字に書くのは、それを守るためではなく、むしろ守らなためなのである」（セルギイ『極東にて——日本の宣教師の手紙』一八九五—五年）

セルギイ・ストラゴロツキーはロシアへ帰ったあと教会のヒエラルキーを昇り、スターリン体制のソ連でロシア正教会を導く立場に立った。かれは、若いときに日本と対比して思ったスラヴ人の「守らないため」の法律のおそろしさを自分の体で知った。

次に紹介するように、十九世紀ロシアの多くの知識人たちは、ロシアの歴史には秩序ある社会が一度として形成されたことはないという歴史認識を持ち、ヨーロッパとの対比において自国ロシアの無秩序性を異常に鮮明に意識してきたのであったが、

宣教師ニコライやセルギイは、極東の島国日本との対比において同じことを感じたのである。

聖職者の家で生まれ育ち、神学校、神学大学で教育を受けたニコライの教養は、ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語、フランス語を基礎としており、半ヨーロッパ的と言えないことはない。しかし、どっぷり西欧漬けになっていた世俗ロシア知識人のそれとは、かなり違っており、ヨーロッパを理想的秩序の社会と思い込む世俗知識人のヨーロッパ崇拜は、ニコライにはなかった。かれの属す聖職者社会には確固として位階制度が機能していた。それでも日本へ向かったニコライは、「アラスカの使徒」といわれた異邦宣教の先達インノケンティ主教の指導もあって、現地すなわち日本の歴史を学び、日本社会の教養を理解し、士族や平民の多くの日本人と直接交友を重ねていったとき、やはり、日本とロシアは違う、「ロシアを支配しているのは法律ではなく、^{ウスマトレニエ}裁量^{ウスマトレニエ}だ」と感じたのである。これは、観念ではなく、生活実感であっただろう。

ニコライの感じた「法律なきロシア」は、現代の日本人が感じる「無頼の国」というロシア・イメージとも共鳴している（内村剛介『生き急ぐ』『ロシア無頼』参照）。

6. チャーダーエフ

秩序なきわれらロシアという自己イメージの創案者は、ロシ

ア思想史の常識を持ち出すだけのことであるが、プーシキンの親友だった思想家ピョートル・チャーダーエフ（一七九四―一八五六）である。チャーダーエフはナポレオン戦争に従軍して各地を転戦し、ヨーロッパに入り、さらにその後のヨーロッパを自ら三年にわたって遍歴し、ロシアへもどつてからは社会的実務に携わることなく、ひたすら、価値あるヨーロッパの対極にある「人類の歴史において無価値であるロシア」という、おそらくいほど否定的なロシア・イメージの形成に打ち込み、その主張を次々とフランス語で発表した。

「われわれのこの奇妙な文明において最もなげかわしいことの一つは、他の国民が、われわれよりも未発達な国民でさえもが、とうのむかしに見出しているさまざまな真理を、われわれがいまだに見出していないということである。：：われわれは時代の外に置き去りにされたような具合で、人類の共通の教育を受けてこなかったようなのだ。：：わが国の青春の悲しい歴史は、野獣のような野蛮行為で満ちている。：：われわれは、他の諸国民のような豊かな活動と高揚した精神の劇の時代を一度として経験したことがない。：：」

ヨーロッパの諸国民は共通の風貌をもっている。一つの家族のように似たところがある。：：さして遠くない時期、ヨーロッパの全体が自分たちはキリスト教徒であると思っていた。そしてキリスト教徒という語が公の法において然るべき位置を占めていた」（チャーダーエフ「歴史哲学についての書簡」

Readings of Russian Civilization II 304)。

チャーダーエフは皇帝ニコライ一世によって「狂人」と断定されたが、その「狂人」のロシア・ヨーロッパ対比論が、その後のロシア知識人の自己把握の強固な原型となった。ドストエフスキーの「中国にある秩序がわれわれには欠けている」というロシア・イメージは、チャーダーエフのヨーロッパを中国に置き換えたものなのである。

ヨーロッパの「旧体制」の支持者ド・メーストルの思想的影響を受けていたチャーダーエフは、ヨーロッパ社会の形成にかかわったカトリシズムを理想化し、それと対比して、古臭い儀礼を墨守して進歩の外にとどまるロシア正教を、諸悪の根源のように見る。ヨーロッパはカトリック教会を柱として統一性と秩序を形成したが、ロシアは、ロシア正教の夜郎自大的な自己正当化の伝統を絶つことなく、長い自己満足にひたっている。ロシアは、全人類的な（ヨーロッパの）歴史の流れから外れてしまった。ロシアには「過去も未来もない」、ロシアはただだっぴろいだけだ——というのが、チャーダーエフの考えの基本である。

くりかえすが、かれは、「秩序あるヨーロッパと何もないロシアとの間に引き裂かれたわれわれ」というロシア知識人の共通自己理解の原型をつくつたのである。なんともすさまじいヨーロッパ崇拜と強烈な卑下であるが、ドストエフスキーは、それを逆転させてロシア自慢に変えたかと言ってもよいだろ

う。

二十世紀の詩人マンデリシタム（一八九一―一九三八）は一九〇五年に次のように書いている。

「西欧には統一性があるのだ！ この言葉がチャーダーエフの意識に閃いて以来、彼はすでに自分〔自国？〕には属しておらず、へ身内のへ人々とその関心からは永遠に引き離されてしまった。（175f）……

西欧的な言葉の意味での歴史を停止させるという、昔からロシアに伝統的な夢想がある。それは、精神を全面的に武装解除させるという夢想であり、その後にはへ平和ミールと呼ばれる、ある状態が訪れるのである。精神の武装解除の夢想は、我国の日常的な視野をあまりに支配していたので、普通のロシアの知識人は、この非歴史的なへ平和」という形以外に、進歩の最終的な目的を思い浮かべることができないほどであった。（180）……：教会、国家、法は、訳の分からぬキメイラたちのように〔ロシア人の〕意識から消え去ろうとしている。そしてついにただ二つのものだけが、差し向かいで、煩わしい媒介なしに残る――人間と宇宙である。

チャーダーエフの思想は、ロシアの伝統的な思考に対して引かれた、厳格なる垂直線である。彼は、疫病を避けるようにして、この無定形の天国〔ロシア〕から逃げていった。……彼の地〔ヨーロッパ〕、ゴシック様式の針葉樹が理念の光以外の光を通すことがない、社会的教会の森の中で、チャーダーエフの

主要な思想は、熟していった。（182）……

「我々のうちのどれほど多くが、精神的に西欧へ亡命していったことだろう！ 無意識な分裂の中で生き、身体は此の地にあり、魂は彼の地にとどまった者たちが、我々の中にどれほど多くいたことだろう！（185）」（マンデリシタム「チャーダーエフ」斎藤毅訳）

ロシアの知識人は、イギリスの知識人とは違って、安心してロシア人のままではいられなくなったのである。自分が何に帰属しているのか、激しい不安にとりつかれたのかもしれない。ロシア思想史は心理学的解釈を求めている。

マンデリシタムは、「平和」の夢想の伝統につらなるロシア知識人の一例として、ポベドノースツェフの同時代人レフ・トルストイをあげている。「単純に生きる」ことを宣伝し一九一〇年に巡礼者のようになって死んだトルストイは、西欧派であるマンデリシタムの目には、ロシア的蒙昧（オブスキュラチズム）の典型であった。

トルストイについては、マンデリシタムの同時代人であったゴリーキー（一八六八―一九三六）も同じ見方をしている。

「トルストイのあいまいなへ無為へ悪に対する無抵抗」という説教は、すべて、古いロシアの血が病的な発酵をみせたものである。その血は、モンゴリアの狂信によって毒されており、たゆまざる創造的労働を旨とする西欧に対していわば化学的に敵対反応を示す血である。へトルストイのアナーキズムと呼

ばれているものは、その本質と根源において、われわれの真に国民的な特質を、すなわちはるかな時代からわれわれの血肉と化しているへてんでんばらばらににやりたいという渴望を、表している。われわれは今日に至ってもなお、この渴望に情熱的に引きずられている」(ゴリキー「レフ・トルストイ」)

チェホフ(一八六〇―一九〇四)もまた、マンデリシタームの言う「人間と宇宙」しか残らない「平和」を夢見ていたのではないだろうか(チェホフ『ともしび』。ビリントン『アイコンと斧』第五章)。

マンデリシタームは、「普通のロシア知識人」は進歩の最終目的として、思考の停止した「平和」とよばれる状態を思い浮かべることしかできない者たちだと言っている。しかし、普通ではない知識人、いわゆる反体制的インテリゲンツィヤもまた、同じような「平和」を夢見ていたのではないか。評論家ベリンスキーは、ソ連時代のロシア思想史研究者たちによって「革命的民主主義者」の代表とされていたが、そのベリンスキーでさえも「平和」の夢想家の一面を持っていた。「金持ちもなく、貧しい者たちもなく、ツァーリも臣下もなく、あるのはただ兄弟たち」というのがベリンスキーの理想だった(ベリンスキーのポートキン宛の手紙。一八四一年九月四日。コマローヴィチ『ドストエフスキーの青春』)。

もちろんドストエフスキーも、その「平和」の夢想家の一人である。「あらゆる敵と敵が、理由なんぞまったくなしに、仲

直りして、みんながうれしさのあまり往来の真ん中で抱き合う」ことこそが、ドストエフスキーの生涯変わらない「進歩の最終目標」だった。ドストエフスキーが「進歩の最終目標」だと言いつづけた「自然とのふれあい」もまた、「平和」のヴァリアントである(ドストエフスキー『かよわい心』、『作家の日記』一八七六年。中村『ドストエフスキー・作家の誕生』110、『ドストエフスキー・生と死の感覚』193)。

ドストエフスキーの感じた秩序不在感、ドストエフスキーが、現実性のある近未来ロシア社会像を形成することができなかったこと、そしてドストエフスキーが、「ヨハネ黙示録」風な終末感覚にとりつかれていたことと関係がある。『悪鬼ども』のキリーロフに似ているが、建設可能な近未来ロシア社会像への愛着あるいは興味が、ドストエフスキーには欠けている。われわれは近い未来に現実になるであろうロシア社会のイメージに向かつて一段一段階梯を昇っているのだ、自分はその現実性のある未来をめざしてことばを発しているのだという、現実的漸進志向が、ドストエフスキーには欠落している。かれは『罪と罰』や『未成年』で、よりよい社会のために「一つずつレンガを積む」という考えはきらいだと、言っている。ケーオスのこの世界に、ある日突然「新しいエルサレム」が実現するという夢が好きだというのである。

それなら、社会に秩序がなくてもかまわないわけである。司馬遼太郎は、ドストエフスキーは「日本の文学青年にとって永

遠の存在であるかもしれない」と微妙な批評を言っている（司馬『『坂の上の雲』を書き終えて』）。自分をも含めて問うのだが、日本の文学青年は、どのようなドストエフスキーを愛してゆくのだろうか。かれらにとって、秩序不要者・終末論者ドストエフスキーの文学は、果たして「永遠の存在」なのだろうか。ロシアの知識人は、「普通」も「特別」も、心理的には「千年王国」の新しい信者だったのではないか。かれらは右派も左派も、マルサスの生存競争的社会イメージを嫌悪し、相互援助型社会を好ましいと感じた。宗務院総監ポベドノースツェフにさえも、その伝統的な「平和」の夢想が見られる（『宣教師ニコライの全日記』第一巻、註解No126「マルサス嫌い」参照）。

マンデリシタームの「ゴシック様式の針葉樹が理念の光以外の光を通すことがない、社会的教会」、あるいはゴリキーの「たゆまざる創造的労働を旨とする西欧」ということばからもわかるが、ロシアの知識人にとってヨーロッパは、秩序と活動の国という仰ぐべき輝かしいイメージだった。それが、二十世紀になっても、ゴリキーとマンデリシタームのような、志向、気質、経験において互いに非常に異なるロシア人を一様に魅了しつづけたのである。

ドストエフスキーも、文化の面では自分たちは西欧に比べて絶対的に下位にあると感じていた。あらゆる文化は対等だと教える二十世紀の文化人類学は、まだ助けに来てはくれなかった。

（だからドストエフスキーはダニレフスキーにとびついた。）

しかし「天邪鬼」（『地下室の手記』）のドストエフスキーは、チャーダーエフとその生徒たちとは違って、「教師」ヨーロッパの悪口も言いたかったのである。一八四八年のペトラシエフスキー・サークル事件裁判でのドストエフスキーの供述（「自分たちにとってヨーロッパは反面教師である」）にも、すでにその姿勢は感じられる。一八六二年の『夏の印象をめぐる冬の随想』のとめないヨーロッパ罵倒は、前にも言ったが、劣等感の裏返しである。ドストエフスキーの場合、賛美と悪口が水と油ではなかったことがよくわかる。いま『夏の印象をめぐる冬の随想』を読み返すと、その悪口があまりに荒唐無稽で、いっそ気持ちいいくらいである。『カラマーゾフの兄弟』のイワンのヨーロッパ・イメージもドストエフスキー自身のものだった。ドストエフスキーは自分の内の西欧を「聖なる墓場」という両義的なイメージに変えたい。そして「いまだに真理を発見したことのない、無価値のロシア」（チャーダーエフ）にも、未来の価値を認めたい。だからドストエフスキーは、『未成年』のヴェルシーロフに「ヨーロッパ葬送の鐘」を鳴らさせ、ゴル・ポフのような「農民哲学者」に期待をかけた（中村『ドストエフスキー・作家の誕生』²⁹⁵、『宣教師ニコライの全日記』第一巻、註解No185「パウエル・プルースキー師」参照）。

7. われわれは考えなければならない

一八七三年の「作家の日記」の第一回「はじめに」が私たちをひきつけるのは、そこにも、すでに秩序を確立したとされる文化、すなわち「針葉樹が理念の光以外の光を通すことがない」ヨーロッパや、「千巻の儀式の書」を有する中国に、膝を屈したくないドストエフスキーがいるからだろう。「遅れている」自分たちを支えて、「われわれはこれから先少なくとも千年にわたって沈黙考〔Задумчивость〕の歳月を経ねばならないだろう」と語るドストエフスキーである。

ドストエフスキーは、われわれはヨーロッパの手本をそのまま受け入れるのではなく、初歩的な根本的なことを自分で考えなければならないと言っている。自分たちはいわば「考えるロシア人」の初代なのだというのである。帰るべき自分たちのロシアの伝統はまだない。これからも形成されないかもしれない。正教会はナロードのものであって、「国内異邦人」である知識人のものではない。トルストイが描くような、秩序やルールや儀式やコモン・センスといった確固とした共通の「約束ごと」が身につけている「貴族」に対しては羨ましさを覚えるが、それを愛することができない「子ども」もいる、とドストエフスキーは感じている。そういう「子ども」は、ろくなことを考えつかないとしても、自分のかほそい力であらゆることを休まずに考えざるをえない、というのである。『カラマーゾフの兄弟』

のイワン・カラマーゾフは、へぼくたち、くちばしの黄色いロシアの青年は、閑雅な哲学談義をたのしんでいるわけにはいかない。伝統というものが無い自分たちは、天地開闢以来の大問題を自分たちの頭で解かねばならない」と苦しそうに言う。『カラマーゾフの兄弟』第五編三。中村『ドストエフスキー・作家の誕生』176)

小説家ドストエフスキーの意識がそのように劣弱さや幼稚さに対しても開かれた初発性のものであったから、革命運動に対する「悪意にみちた暴露文学」であるとされる『悪鬼ども』までが、書かれてから一三〇年経ったいまでも、いわば初々しい暴露の魅力を保っているのである。

『悪鬼ども』のキリーロフも、典拠、前例、手本というものがなしに、いわば初めて考える人のように一人で考えなければならない。へ神は必要だ、神は存在すべきだ。しかしどうやら神はいないらしい。そして、神の存在を問う者は、こんなどっちつかずの解答では、満足できない。いや生きてゆくことさえできないとキリーロフは考える。かれはへ人を殺してもいいのか、こどもの頭をぶちわつてもいいのかとも問う。ヨーロッパ人の教養はないから、そんな幼稚な問いを真剣に問わずにいられないのである。キリーロフたちにとって、ロシアの教会は自分の思考にかかわる権威ではない。ロシアのキリストを信じたいと言うシャートフでさえ、現実のロシア教会とも、伝統的な聖者伝とも関係のない「ただだっ広い」思考空間で自分の

感覚をたよりにキリストのことを考えている。

「現代ロシア」の家族を主題とする『カラマゾフの兄弟』に、神の世界創造について屁理屈を言う下男スメルチャーコフが登場する。この下男には、「尊い」ことが存在するという感覚も「感謝」という感覚も育っていない。ドストエフスキーはスメルチャーコフについてこう言っている。

「スメルチャーコフはときどき、家の中、庭先、あるいは道路でも、立ちどまって、物考えにふけり〔задумывается〕、そのまま十分間もじっとしていることがあった。人の顔を見て何を考えているか当てる人相見なら、そのスメルチャーコフを見つめて、こう言うだろう。この男は何か思っているのでも考えているのではない、ただ瞑想〔козепание〕のようなものにふけているだけなのだ、と。瞑想家〔козепиарец〕は、民衆の間にはかなりたくさんいる。おそらくスメルチャーコフもそういう瞑想家の一人だろう」(14・116)

すでに「考える」ことを知りそれに没頭しているイワン・カラマゾフは、スメルチャーコフについて、「ロシア民衆の中から最初にあの手の中に出てくるんです。ああいう連中の後に、もう少しましなのが現われますよ」と言っている。

ロシア社会の土台である広大で暗い世界の蓋が開いて、何の思考の訓練も受けたことのない「下司な下男」たちまでが、「考える」にはまだ至らないが、その前段階の「瞑想のようなもの」にふけりはじめた。スメルチャーコフはいま、神の世界

創造の矛盾を指摘して悦にいつている。(もちろんかれは愚鈍ではない。巧みに人を殺すこともできる。)やがて「もう少しましなの」が登場してきて、ものを考えはじめるだろうというのである。